

編 集

東京慈恵会医科大学教授
聖路加国際病院医長
順天堂大学教授

阿 部 正 和
日野原重明
本 間 日 臣

北里大学教授
北里大学教授
自治医科大学教授

岡 部 治 弥
田 崎 義 昭
高 久 史 磨

133 氏分担執筆

新臨床内科学

札幌医科大学教授・内科 和 田 武 雄

「意を尽くして、要を得る」。それが新臨床内科学を通覧してまず感ずることである。

内科学は本来臨床医学全般の基礎面に付して学ばれるべき学問的性格のものであり、それだけに、きのう・きょうの基礎医学周辺の広い学問の進歩をとり入れながら新しくされなければならない。性急にそれをとり入れればとかく半可通の難解性をまぬがれ得ないし、内容が錯雑化して硬直となるきらいなしとしない。

本書は一見して、その内容の新しさ、スマートさが印象的である。印象的ということは、各論の一つ一つをひろっても、よく構成の共通性が理解を助け、重要なポイントが簡潔に、しかも平明に記述されているからであり、わかりやすくてしかも内容があるからである。多くの執筆者の手によってこれまでよく調整されていること自体が「意を尽くして」いることであるが、その内訳がまた「要を得たもの」である。編者の練

られた構想と力働の成果に敬服するものであるが、その点からの印象は新臨床と打たれた書名の意味するところにもある。主として診断と治療との2面に力点をおきながら、それを今日的に、またあすへ向かって説く姿勢を感じさせるし、内科学の臨床が生き生きと感じられる。それが書名のよそおうところであろう。

総論においては、手を取り、目を向け、耳をひらかせる配慮のゆき届きがあり、医者に患者の平面で診療する心得を教える。病歴という記録、文字がコトバを伝え、心を通わせる意味、内科学的意味を教える。治療とはなんであるか、臨床検査とはなんであるか、検査成績の背後にあるもの、患者が体表にあらわす病気の前景から内容にいたる思考過程はどうなければならないか。従来もあった診断治療の手続きが、そこでは鮮やかに今日的に衣がえして説かれて

いまや個人と社会と病気とが、環

境・遺伝上の問題理解の域にあることを示し、ここにも日本の医療に即した本書の目的をみることができるが、これがまたよく項を新たにしてまとめられている。

ベッド・サイドの学問としてあるべき「内科学」を鮮明に示した書物ともみられるが、編者らの意図はむしろそのようなことよりも、若い学徒がどのようにして内科臨床の本筋をとらえるか、そのことを考えられたことであろう。

勉強のし直しを考えられる実地医家各位にとっても、最も分かりやすく、しかも役立つことの多い書物として推賞したい。序に言われるように、desk reference としての利用価値はたしかに大きい。欲をいえば、心にくさを覚えさせる文献の補足について、その内容にもう一步吟味をお願いしたいという一点である。

(B 5・頁866・図105・写真10・
¥8,500・〒300) 医学書院刊